
からふるわーるどっ！！

AM ヴィス TO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

からふるわーるビッ！！

【著者名】

ZZード

ZZ88335ZZ

【作者名】

AM ヴィス TO

【あらすじ】

その世界は俺に何をくれるのか。俺はその世界で何をするのか。

色にあふれ、色を基軸とするその世界で、俺は家族を入れ、仲間を入れ・・・。

そんなこんなでやつてる今日もみんな楽しくていいなって思っちゃうのが俺なんだけどな！

心の色でモンスターなどと心友を結び戦い旅をする世界へのトリップ系りびゅこめでー！

序話

「すみません。はい。ありがとうございました。はい、では。」

「ふう・・・」

親戚の電話をおえて、俺は居間のソファーに崩れ落ちた。未だに実感がわかない・・・。

「死んじまつたん・・・だよな・・・。オヤジ・・・。」

オヤジが病氣で死んでしまってから一週間。親戚は心配してくれて電話やいろいろな世話を焼いてくれる。

母さんは俺が小さい頃にもともと病弱氣味だったためなくなってしまった。それから男手一つで俺を育て上げてくれたオヤジこと黒乃隆は俺、遼が高校に上がつてすぐ病氣を患つた。

「俺も母さんのところへ行くときが来たのか・・・。」なんてつぶやいていたが・・・。死んだ時は、言い方はおかしいかもしれないが、すぐあっさりとしていた。大切にしていた母さんとお揃いだったという水晶のはまつたバンブルを俺に渡したかと思うと、ゆっくりと息を引き取つた。

「なんとか・・・やつてみるしかねえな・・・。うしつー。」

パシッつと頬を叩いて立ち上がる。俺は机の上においた二人のバングルを手に取り部屋へ向かつた。

部屋に入ると、黒い煙が揺れていた。

「つー！火事か！？」「

いや、ちがう。

それは、まるで炎のようになにやらめき、しかし深みの見えない黒さを持っていた。

「なんだ・・・これ・・・」

思わず俺は手をだしてしまった。

俺の手が触れた瞬間、その煙のようなものは俺の腕にまとわりつき全身を覆つかの勢いで俺の体に迫ってきた！！

ツー！

声を出す暇もなく、俺はそれに飲み込まれてしまっていた。最後に見たのは黒のなかにある真っ白な温かみを持つ煙だったというのを俺はしばらくは思い出せなかつたのも仕方なかつたんだと思う。

一話

目が覚めると俺は森の中に倒れていた。

「なんじゃこりゃあああああ

完璧におかしい。いや何がおかしいってあの部屋にあつた黒い煙も
そうだがここビリー？ すげーいつもそつとした森の中みたいだけど
完全に俺部屋にいたはずなんだが！

約10分後

一通りパニックを起こした俺はため息をついた。

まずここがどこだかっていう問題はもう愚問だな。・・・わからな
い。

手持ち品 西親のバングル。・・・のみ。

「遭難じゃん・・・。いやどこだかわからない場所にいきなり放り
出されて遭難も何もないけどさ・・・。」

とにかく俺は歩いてこの森からどうにか抜け出す方法を探し始
めることにした。

「腹・・・減った・・・。」

1時間弱歩き回った結果、周りの景色はほとんど変わらない上空腹

に苛まれていた。

「へへう・・・わかつてゐけど自分で状況整理すると辛いなあ・・・。
。もつわけわからん・・・?」

耳を澄ませるとサラサラと水の流れるような音がした。音のする方
向に進むとそこには小さくはない小川が流れていった。

この川を下っていけばいかは出られるんじやないか? 民家もある
かもしれん!

汚くもなさそうな水だったので軽く喉を潤し、元気を取り戻した俺
は川を下っていった。

このときから違和感はあったのだ。空腹感
はあったがそれだけで、歩きなれない森の中を一時間弱も歩い
て疲れさえ感じていなかつたのだから。

・・・出た。・・・出れたあああ! ! ! 森林? 脱? 出 ミキラツ!
しかしここからとつあえず進むしかないんだよなあ・・・ここほん
とどこなんだらう。煙に飲まれて来たから日本でもなし・・・まさ
かこれがいわゆる異世界トリップ! ?

川を見つけたところから歩いて30分。結構あつさつと森を抜け、
川沿いに進んでいた。
自分で思いついてしまった異世界説が否定できない中、俺はついに
村を見つけた。

なんていうかね・・・うん。異世界・・・来ちゃつたっぽい。

ここからでも軽く見える村の中には馬のよひに見えるが足が6本の生き物がいた。

・・・ゑ?何あれ。

よくわからない状況の中でも人がいたことに安心してしまい、気を抜いた俺は軽くしゃがみこんでため息をついた。顔を上げてとりあえずあの村に行こうとしたとき、後ろから何かが走ってくる音が聞こえ振り向くとそこには・・・

「お決まりのパターンって」うのを言つとかね・・・。

恐怖や驚きを通り越して俺はもう一度ため息をついた。走ってきてるの、さう。狼だったのだ。

しかもここは異世界ということを示すかのようにその狼は体長一メートルはゆうに越しており、牙剥き出しで走ってきていた。

「つおおおわあああああああっ!-?」

ハツとして横に転がつてよけるが足を軽く爪に引き裂かれてズボンが敗れ、血が吹き出した。

痛てえっつっ!-!

軽くだつたはずなのに激痛が走り立ち上がれない!-!

方向転換をして狼は俺を喰らおうかとするよつに大口を開けて突っ込んでくる。

俺との距離がだんだんと縮んでいくが突然狼はスピードを緩め後ろをむいて大きな声で吠えた。

ヴォオオオオオオオオオオ

怖ええ！！！

近くで聞いた狼の鳴き声は咆哮ともいえるほどものだった。

よく見ると村から何人か人が出てきて武器を構えており、狼の近くには両刃の剣が落ちていた。さつきはこれを投げて狼の氣をそらしたんだろう。

しかしながら狼には傷はついてなかつた。しかし村の男の人は雄叫びを上げながら各自剣や斧、槍を構えて狼に襲いかかつた。

大きな盾を持つた人が狼の爪を弾いてひるませ、その隙に後ろから武器を持つた人がでて殴りつけていく。さながら映画のようなそのシーンはしかし現実のものであつて、盾で防ぎきらなかつた爪を食らつて村の人は吹き飛ばされて行く。

ついには盾を持つた人が押し倒され、食いつかれよつとしていた。

「あつ！」

ハツとした俺は思わず声をだして・・・後悔した。

こちらをむいた狼がまた俺を標的にして来たのだ。俺は思わず下に落ちていた剣を手にとつたがこんなものもつたこともなかつたので剣先はふらふらだ。

近くまで来た狼はジャンプして俺に飛びかかり、おどろいた俺は尻餅を付いて上を見上げがむしゃらに剣を突き出した。

ザシユツー！

肉を切り裂く音、血が吹き出る音。

そして狼は・・・あーしたから首の後ろにかけて剣で串刺しにされていた。

ドサッと横に狼を押しのけはい出るが、狼の血をあびその臭いと、極度の緊張。それによつて俺は村人が走つてくるのを見つつ、気を失つた。

「ん・・・ぐ・・・むう・・・」

「あ、めがさめたかいつーあんたあーめえ覚ましたよーー。」

体を起こすとそこには女人がいた。と、すぐに男の人も入ってきて俺の顔を見てホッとした。

「おお、起きたか。傷の手当はさせてもらつたが、調子悪けりやすぐにいつてくれ。つと自己紹介せにやならんな。俺の名前はドーグ・バルランだ。この村の村長なんてえもんをしていく。こいつは妻のウルティナだ。」

「あ・・・はい。俺は黒乃、黒乃 遼です。手当ありがとうございました。」

「クロノ・リョウか。んでリョウよお、オメエその年でのボルティモを倒すなんざやるじやあねえか。お前のおかげで村の若けえもんがやられずに住んだつて話だ。しかし、オメエさん一体どつから来たんだ? あつちの方角にはたしかリイノの森しかねえはずなんだが・・・。」

とバルランさん(俺の名前をリョウといったあたりから)では前半が苗字つてことでいいんだら(つ)がまくし立ててくる。

あの狼はボルティモつていうのか。いやそれよりもだ、俺が異世界から來たつて話をしてすぐに信じてもらえるだろうか・・・? 昔読んだことのあるいわゆる異世界モノではバレるとその国の貴族やら

研究者やらに・・・って感じだったが。この世界ではそういうことは限らないし・・・

と俺が悩んでいるとウルティマさんがバランさんを後ろに引つ張つていった

「そんなに一気にまくし立てたって答え用がないじゃないかい！ごめんねえ、リョウ・・・つていつたかね。詳しい事情はおいおい聞かせてもらえると嬉しいんだけど、今はあれだらうぐつすり寝てたからお腹減ったんじゃないかなえ。」

途端、俺の腹は「ぐう」と情けない音を出した。

ウルティマさんはハツハツハと大笑いして「今つくるからねえ」と部屋を出ていった。・・・はずかしい。

いつの間にかバランさんも出ていったようで俺は一人になり、これからを考える。

とりあえず俺の事情は今のところ聞かれてはいいが、話すわけにもいかないだろう。記憶喪失・・・とでもいつておくか・・・しかし、どう生活していくばいのか・・・。

と考えれば考えるだけ問題が出てくる。

俺がウンウンやっているとウルティマさんがよびに来た。

「つまー・・・つー」

「せうかそうか。たくさん食べなつ。」

ウルティナさんが作つてくれたのはなんの野菜だかよくわからないがとにかくたくさんの野菜が入つたスープだった。空腹も相まってすゞく美味しいつ。

結局3杯ほどおかわりして、落ち着いた頃、ウルティナさんは問い合わせてきた。

「それで・・・ワヨウ。いつたいビーフして森の方角からきたんだい？」

「それは、わからないんです。記憶がなくなつてゐみたいで・・・。自分の名前と少しの知識くらいしか頭になくて・・・。」

決めていたとおりに話す。「世界のことはほとんど知らないんだ、出るボロもないだらう。」

「そうかい・・・。そりややべ苦労したんだらうねえ・・・。こんなわかなうなのに親ともはぐれちまつてるようで・・・。ひとビーフしたんだい！？」

ん？と俺はふと顔に手をやるとやはり水滴が。・・・涙？

「もしかして・・・親・・・いないのかい？」

「へつ・・・・・

「うえきれずオヤジの顔が頭に浮かぶ。・・・まずい、記憶喪失ってことにしてるのに・・・

と、ふとやわらかなこっちに陥った。

「ウルティナ・・・さん?」

俺はウルティナさんの胸に抱きしめられており、あたまをなでられていた。

「いろいろ複雑な事情があつたみたいだねえ・・・。そうだ、よかつたらうちに住むことにするかい?記憶が戻るにしても住むところがあれだろ?いろいろと教えていいってやるからさ。その内に記憶ももどるかもしれんじゃないか。ねえあんた。」

「ん・・・?おお、俺は大歓迎だが・・・」

だが・・・?なにがまづいことでもあるんだろ?か。・・・俺はやはりよそのものだし、

「だが、畠仕事なんかも手伝つてもうつからな!ボルティモを倒したおまえの腕力、あてにしてんぜ。」

ヒカツヒと笑ってくれるバランさん。

「うあ、・・・あはいっ!」

恥ずかしいことに俺の顔は涙でぐしゃぐしゃになってしまったみた

い
だ
・
・
・
。

泣きじゅくつたその日はバルンさんの家の納屋をちょこりと改築して俺の部屋を作つてもらひ、ぐすりと眠らせてもらひた。

翌日。朝ほんをもらひてから、俺は農具を担いで、バルンさんの後につけた。俺の身長が一六五とちよつとで、見上げるほどの中幅は俺の倍以上ありそうだ。

後ろを歩いていると、バルンさんの身長、とこりつ体型はまさに巨躯だつた。俺の身長が一六五とちよつとで、見上げるほどの中幅は俺の倍以上ありそうだ。

畑につくと、すでに作業をしてる人がちらほら見える。俺が農具を置くと、こっちに駆け寄つてくる人がいた。うつすらと覚えがあるその顔は昨日の盾を構えていた人のようだ。

「おはようございます村長。そつちの方は・・・昨日の。」

「おは、こいつあクロノ・リョウつてんだ。記憶がねえみたいでな、しばらくくうぢで預かることにした。」

「さうなんですか。あつ僕の名前はトウマです。ルーツ・トウマ。昨日は僕がやられそつた時に氣を引いていただいて・・・。

」

俺は首をぶるんぶると振る。見た感じ20代前半男の人には頭を下げられるなど慣れていない。それに昨日のは意図してやつたわけじゃないのだ。

「じゃあリョウ。最初はこのトウマについて行ってくれるか。トウマ、リョウに手伝わせるからいろいろ教えてやつてくれ。畠のことだけじゃなくて、いろいろな。」

俺とトウマさんは同時に「はい」と返事をして顔を合わせて笑顔を浮かべた。とつつきやすそうな人だな。

「まずは畠をほって耕すことから始めようか。じばらへはこの作業をするんだ。」

ヒトウマさんはひる―――い畠を見渡す。周りでは様々な人が木の棒のようなもので土を耕している。おそらくはここでこの村全体の肥料をとっているんだろう。見た感じだと科学的なレベルはすごくひくこようだ。

「ここには村で飼ってるあのボウロロンをはなして糞をさせて、ここに肥料にしてるんだ。」

と6本足の馬のようなものを指す。あれはボウロロンと云うのか。

「こつちはこの時期になるとボウロロンを小屋にしまふんだけど、その時あのボルティモに何匹もやられてたんだ。今年は君のおかげで一匹もかけることなく、この作業に入ることができたよ。」

とまた感謝されつつも俺たちは作業を開始した。農具の技術も発達していないのか、耕す道具はこの棒なので、すぐくたいへんそうだ。あまり無茶するなと言われているので軽くトウマさんと話しながら

進めていく。

「トウマさん、この村ってどこかの国に属してるとかは・・・？」
「さんずけなんてやめてくれよ。同じ村に住む仲間なんだ。ふむ・・・。
・国か。まず大まかなところから話していくことにしよう。何か思
い出せそつならなんでも聞いてくれ。」

俺が頷くとトウマは話し始めた。

「この世界は大きく分けて4つの国で構成されている。つていつて
も領土の奪い合いとかはやってないよ。すごい昔にはあつたって言
われてるけど、今の国の形態になつてからはまったくだね。大陸は
2つあってこう左右に分かれてるんだ。」

と、地面に耕し棒で左右に半分から別れた大陸を書く。

「右側の上半分がライロス国。下半分がアンダルシア国。左側上半
分がメディナ国。下半分がレグルス国さ。この4つの国はそれぞれ
人の名前が国名になつてて、この4人はそれぞれの国の初代王であ
り、共に戦つた仲間でもある。この戦つた相手というのがルシフェ
リアという人なんだけど、この人については人間なのか、魔物な
のか、死んだのかさえわかつてないんだ。名前しか伝えられていない
というね。まあそういうことがあるから、4つの国は常に良好な関
係を結んでいるつてわけ。それで、さつきの質問で、こここの村はレ
グルス国最南端リイノの森。君が来た方向にある森だね。そこに
一番近い村、その名もドーグ村さ。」

と、ここまで語つてトウマは他に質問は?といつちを見る。

俺が悩みながら土を耕していくと、トウマは「」に向かひ、「…

「君の心の色はどうなんだ？」・・・？」

髪の毛を見ながらそいつぶやいたトウマは、あと別の説明を始めた。

「心の色・・・と聞いて何も思い出すことはないみたいだね。見てくれ。僕の髪の毛の色はみずいろだう？これは心の色と呼ばれる体内魔力の色が出てきたものなんだ。体内魔力？って顔をしてるね。それも話しておこう。体内魔力というのはそのまんまの意味。体内にある魔力のことだよ。これは色をしめすだけのものなんだけど、これが重要だ。この世界には彩晶というものがある。世界中にあり、しかしながら見つけられるものではない。この彩晶をもつた状態で心の色が細かい状態まで同じものを持つ者同士が心友という契約を結ぶことができ、心友となつたものは心が通り合ひ、お互いを最も信頼できるパートナーとなることができるんだ。その心の色を示すのが体内魔力ってこと。多くは髪の毛に浮かび上がつてることがあるけど、世代を飛ばして遺伝することもあるから正確じやない。それを測るためにものもあるけど・・・今はまだこの話はいいかな。」

「

トウマは言葉を区切る。何か思い出したかい？とも言つよつ。「…」俺は首を振りながら内心すくくワクワクしていた。心の色をそろえたものが心友となつて信頼できるパートナーとなる。・・・すぐいい。

と、俺はトウマに気になつた疑問を告げる。

「体内魔力って言つてたけど、それ以外に魔力つてあるつてこと？」

「ああ、うん。それもあるよ。体外魔力、これは単純に魔力って呼ばれるかマナとも呼ばれるものなんだけど、こっちは個人所有量つてものがあつて主に魔法だね。炎を出したり、水を出したり……。便利なものなんだけど、たいていの人はほとんど所有量はないんだ。媒体がないと人じゃあ使用することもできないしね。僕のお父さんは一定魔力所持者。つまり魔法使いで、一番近くの街、ローンテナ一つてどこで働いてるんだ。これも魔力を測る道具があつてこの村の人も定期的に来る行商人の人に測つてもらつたことがあるけどほとんどのないらしいね。」

僕もお父さんの道具を触らせてもらつたときにやつてみたけど、露程度も水が出なかつたよ。と苦笑してトウマは説明を終えた。

途中からドキドキが止まらなかつた。俺も魔法が使えるかもしけないと思うと言葉にできない何かがウズウズと好奇心を刺激してくる。

「さてと、もう少しうして終了の時間だ。いつちょっとやつちやいましょうか。」

とトウマは棒を持ち直す。俺も気を取り直してガスガスと土を耕していった。

バランさんが呼びに来るまでものすごい勢いで仕事を片付けたため、まわりの村の人にはすごい驚かれたようだ。

「よし、さよなら」今までにしておくか。」

畑に畝を作り、野菜を植える準備までしたところでバルサンさんが声をだした。

初めてここでの畑で農作業をした時から早一週間。足の怪我が直ぐに治った俺は村の人たちと同じくらいの量の仕事をこなせるようになり、いろいろな人たちと沢山話をして、なかよくなっていた。

「え？ 狩りですか？」

トウマと一緒に終了後の雑談をしてると村の屈強な男たち3人とひとりの女の人があちがづいてきて、その中の一人の男、ジャックさんが狩りにいくかと誘ってきた。

「いいじゃないカリョウ。行っておいでよ。ジャックさんは力もあるし、周りを見て統率もできる。そかのメンバーもそれなりの腕を持つてるし、危険はないよ。」

たしかに男たちは強そうといふのはわかるが・・・

と、俺の視線に気づいたのか女人、ファイアナさん（18歳）はこちらを一瞥して言い放った。

「あんたうちが力ないとでも思ってるのかい？ 少なくともあんたよりはあるように見えるけどねえ。」

ジャックさんたちボルティマと戦つたメンバーは「ああ・・・まあ仕方ないよな」と俺の体を見る。まあ、俺見た目は普通の一般人レベルの肉体だし、畠仕事がいっぱいぱいぱいだと思われているんだわ。

「まあどうもいやわかるだろ? いくつてことでいいよなあ? ボウズ。」

「はい。行きます。それで、何を?」

「ああ、クルトウをな。村の在庫がなくなりそうなんだ。」

クルトウといつのは山にいる鶏みたいな鳥のことだ。使い勝手が良く、どう調理しても美味しい肉だ。

「お前さんの武器は何がいい? 斧と剣、あとは弓があつたな。」

ジャックさんたちがいろいろ武器を言つてくるので、俺は「じゃあ剣で」と返事をして一旦家に戻ることにする。

俺はオヤジのバングルをはめて母ちゃんのバングルに行つてみると声をかけてから家をでた。

集合場所に指定された村の入口にはもうみんなが揃っていた。

「おおきたかボウズ。んじや行くとすつか。場所はここから30分ほど小さな森だ。」

そういうえば時間の単位などは俺の世界と一緒にだつたなあと思つ。俺自身は腕時計などは持ってきては居なかつたがバランさんの家には

時計があつた。それには文字盤が1・2個あつてもとの世界と何ら変わりない様子だつた。しかし、この世界に来てから言葉は通じても文字がよめなつたりするのはなにかきっと翻訳してくれる的なものが作用してゐるんだろうが、どうせならもじもよめるようにしてほしかつたなあと思つ。

そんなこんなで森に到着するとジャックさんは声を上げた。

「よーしついたぜ。おつとボウズこつは剣だ。」

「あ、ありがとうございます。」

「今からだとだいたい3時間ほどやつてから帰るとちょうど暗くなる程度だな。じゃあお前らは慣れてるから一人であつちのほう。俺とフィ嬢とボウズはこつちだ。最低でも10匹はとつてこいよ。んじゃ解散。」

二人と別れて、俺たちは森の中に入った。少し進んだところで近くの茂みからクルトゥが一匹抜けていった。

「フツ！」

俺が駆け出そうとするとフィファナさんが俺より先にクルトゥにかけより、首に短刀をかけてひくように切り裂いた。クルトゥは声も挙げずに物言わぬ骸となつた。

「こなんものか。」

「すげえ・・・フィファナさんが首に短刀をかけるまでクルトゥは気づいてない様子だつたぞ！？」

「おお、さすがだなあ。んじゃオレらも負けなによ！」
主は木の実でもとつてウルティナをんこもつてこつてやると喜ぶん
じゅねえか？」「

俺は頷き、歩を進める。しばらく行ったところで、赤い木の実がな
つている茂みを見つけそこで実をつばんでいるクルトウ3匹を見
つけた。

「一人一匹づつってことだ。行くぞー。」

それぞれに駆け寄った俺たちは武器を構える。俺が狙つたクルトウ
は運悪く食事を終えただつたようだ、一いちらを振り向き俺に気づく
と、「ぐうえぐうえ」と鳴き声を上げる。

「わるいなつと。」

剣を振り下ろすが、クルトウは素早い拳動で横に避けて俺に向かつ
て嘴で攻撃してくる。

ギギギギギギギイツ！…！

「うおおうー？ ック！…！」

剣を横に構えて攻撃をうけ、思いつきり振り抜く。吹っ飛んでいく
クルトウ。だが空中でホバリングして体制を立て直すときれいに着
地をした。

「鶏みたいなくせにとべるのかよッ」

俺はつぶやきながら攻めに転じ、今度は避けられないよう鋭く剣を突き出す。クルトゥは飛んで逃げようとしたが、俺は軌道を上にずらし、クルトゥを串刺しにした。

「ふう・・・」

と周りを見ると一人ともすでに終わっていた。見たところジャックさんは一撃で叩き伏せ、ファイフアナさんはさつきと同様にしてクルトゥを倒していたようだ。

「遅かつたじゃない。そんなもんなの?」

ファイフアナさんに言われながら俺はジャックさんの言ひとおりに死体の処理をして、木の実を集めた。

その後は団体を見つけたり、個別に木の実などをあつめたりして集合の時間までには1~2匹と袋いっぱいの木の実を手に入れることができた俺たちは集合場所で待っていた。

「うーん・・・あいつらおせえなあ・・・。遅れるんじゃないねえってあとで焼き入れておかねえと。」

「田標の数が仕留められてるんじゃない? もうちょっと待ちましょよ。」

とジャックさんのつぶやきにファイフアナさんが軽口を入れていると、向こうの方から一人が急いで走ってきた。

「おせえぞ！……ビリしたんだ！」

片方の人は右腕から血を流していて、持っていた槍が折れているようだった。慌ててジャックさんが手当てをする。

「ベアルスがでつ・・・ゼエゼH・・・こいつ攻撃一発もらつたけどつ・・・ゼハアなんとか逃げてきてつ」

「ベアルスだと！？おかしいなこりには出でこなかつたはずだがツーまさか、ボルティモが倒されで、こりへんの縄張りに変化でも出たのかー？」

とジャックさんが叫ぶと、それに重ねたよつじドドドドドドドと地響きが聞こえ、3メートルは超すほどの大きなクマが走ってきた。

「ベアルスつ、くそ、こままじやー！」

と、ジャックさんが立ち上がりつて剣を取るがそれより先にベアルスの方へ走つていく影があつた。

「フィーフアナさん！ー！」

彼女は、小石をベアルスに投げて氣を引くと後ろに回り込んで短刀を背中に突き立てた。

「つー？」

しかし、ベアルスの毛皮に阻まれて体まで通らなかつたのかすぐに離れようとするフィーフアナさん。が、ベアルスは振り向きざまに彼女をつかみあげる。

「くつー！」

俺は咄嗟に走り込んで行くがふと思つ。

俺がかなう相手か？

いや、そんなことを考へてる暇はない。彼女を助けなくては。

「きもああつ」

つかみあげ、叩きつけられて叫ぶフィフアナさんを助けるため、俺は剣をぶん投げた。

ズンッ！

よし、深く刺さつたつ。

しかし、ベアルスは怒り心頭な様子で、俺に向かつて右腕を振り下ろす。

「うおおおおおおおー！」

俺はこの世界に来て異様に強くなつていた腕力を信じ、拳を突き上げる。

ベアルスの爪が俺に届く直前に俺の拳はベアルスの手首にあたり、「ゴキュッ」と骨の折れる音がする

ヴヴァアアアアアアア

大きな叫び声を上げて、去っていくベアルス。

「ダイジョブですか！？ フィーフアナさん！」

俺はがくがくする膝に根性をいれ、フィーフアナさんのもとへいくと彼女も腰が抜けたようにへたり込みんでいる。

「ボウズッ！ 無茶するんじゃないえ！」

ヒジャックさんと一緒に駆け寄ってきて叫ぶ。

「俺はだいじょぶなんで、フィーフアナさんを」

ヒジャックさんにファイアナさんを担いでもらい、村へ帰る準備をする。

帰りはただ無言だった。時折、フィーフアナさんや、怪我をしたおとこのひとに大丈夫かと

ヒジャックさんが声をかける程度だった。

村につくと、すぐに解散となつた。

「お前たちは直ぐに帰つて手当をしろ。ボウズも見た目は大丈夫だが、どうなるかわからんからな。安静にな。」

みんなは返事をすると帰路についたが、フイフアナさんばかりつと
こつむをむいて

「あとで……お礼、いく……から。じゃね。」

とボソリといつて帰つていつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8835z/>

からふるわーるどっ！！

2011年12月31日18時52分発行